

栳食へば

市川浩

本年五月國語問題協議會主催の國語講演會に御講演を賜りたる小澤泰裕、小川榮太郎兩先生共に最近の國語水準の低下を御指摘せらるゝに、世の中の進歩はかなり速く、最近ではリーディング・スキル・テストなるものありて、各種の集團に就き、文章の理解度を測定、解析する技法なりと云々。之を小中高各學年別に實施結果を解析するに、何れの場合も極めて不成績にて、文部科學省も苦慮のことなり。特に小川先生は、生徒は眞實讀むを得ず、文字通りに取るとして、「文字通りにしか取れなかつたら、俳句のやうなもの、(中略)栳食へば鐘が鳴るなり法隆寺をそのまま取つて、だから何ですか、栳を食つたら法隆寺の鐘が鳴りました。それ以上は讀めませんつて事です」とて、かゝる話がプロの物書きにも蔓延して來と警鐘を鳴らされたり。

されどこの句の意味は小生も、これまで能く理解もせずに来れるを恥ぢ、讀解を試みむとす。我が臆解の主題は、「食へば」と「鳴るなり」の二語なり。まづ「食へば」は「食ふ」の已然形に偶然の後續場面への連結を示す助詞「ば」との組合せにて特段の不具合は無けれども、問題は詠者が栳を「食ふ」とするにあり。早口言葉の練習句として「隣の客はよく栳食ふ客なり」とあるも、一般に自分の食事は「食ふ」の謙讓語「食ぶ」、「頂く」を使用す。作者正岡子規が此を知らぬ筈なく、正式の語法に値せぬ食べ方、即ち人家の塀越しに、或いは街路の木に實りたる栳をもぎて「食ふ」など、自身些か禮を失する振舞を咎むる所に、法隆寺の鐘の音を聞きたりと取るべし。而して「鳴るなり」の「なり」は動詞の終止形に附きて推量、傳聞の意を表す助動詞にして、その意は聽覺的刺戟による推量を基本とし、他方視覺的刺戟による推量を原義とする「めり」と一對をなす。偶然鳴りける法隆寺の鐘の音に佛様の御注意を聞き知りたる詠者の氣持には誰もが共感を覺ゆべし。

念のため電網上の解説を閲覽するに、この句明治二十八年 1895 子規二十八歳にての初出にして、當に子規の、明治の、更には芭蕉の「古池や」に竝ぶ俳句の代表作たりとす。その天才にも驚くと共に同記事の註釋は我が臆解とは異れり。序でに「古池や」も閲覽、その讀解も亦我が臆解と異なり有れば、念のため左に示す。

古池や蛙飛込む水の音

臆解・江戸時代には既に水利工事の發展にて、古くは行基や空海などの先覺者の創りし主に農業用の池が使はれずなりて、古池とて放置せらるゝ多かりければ、人々の關心も薄かりけむ。然様なる古池一つの汀に佇みをるに、水の音聞え、見れば蛙が飛込みをり。人間の見捨てつる古池に生物の營みは變らずに續きゐる、自然の偉大さを豈感ぜざらむや。

上記二句何れも能く人口に膾炙す。句意の理解は様々なれど、手の届きたる柿の實を食ひ、池の畔にて魚や蛙を追ひたる少年時代を思ひ出さしむ。この傾向は後の大正三年「SIN」高野辰之作詩の「故郷」に連なり、令和の今日なほ歌はるゝにつけ、かゝる淳朴の民族にして今後豫想せらるゝ冷酷無比のデジタル時代を能く乗切るを得や、和魂電才の發揚を望むや切なり。

(令和三年十一月二十八日受附)